

# あかしん

プランニング・デザイン・総合印刷・オンデマンドデジタル印刷・可変データ印刷  
大判ポスター出力・データベース・PDF高速データ変換・CD-ROM制作・  
3D・CGアニメーション企画・制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21  
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500

E-mail: main@handa-cp.co.jp http://www.handa-cp.co.jp

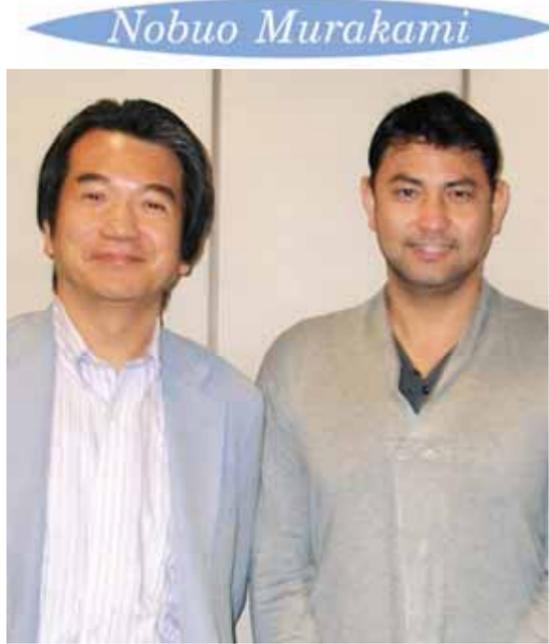
わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ http://www.akai-shinbunten.net <発行所>あかい新聞 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861 企画・制作：株式会社新聞ビル

## 元気のでてくる「ことばたち」

153

### 村上信夫

(アナウンサー)



泳史上最年少でソウル五輪の出場権を獲得した。大学生になった1990年、北京アジア大会で、200mと400m個人メドレー優勝。そして2度目のオリンピックとなった1992年のバルセロナでは、400m個人メドレーで8位入賞を果たした。そして、海軍中佐の広瀬武夫を演じ、一際鮮烈な印象を残した。藤本さんは、元オリンピックの水泳選手。ソウル・バルセロナと2つのオリンピックに出場、バルセロナオリンピックでは個人メドレーで8位入賞を果たした。そして一転、25歳で俳優の道へ。長い下積み時代を経て、広瀬中佐が、ようやく役者としての道を開いてくれた感がある。

木原さんのおまじない  
俳優としてスタートしたものの、鳴かず飛ばずだった。最初の7年間は、ほとんどセリフがなかった。セリフがくるようになってからは悪役か三枚目。体が資本のオリンピック選手だったのに、ダンスもできない。周りはみな年下ばかり。正直焦りもあったが、「4年間は石にかじりついても続けよう」と思っていた。オ

**■村上信夫プロフィール**  
NHK エグゼクティブアナウンサー  
1953年、京都生まれ。明治学院大学卒業後、1977年、NHK入局。富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50) これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。趣味は、将棋。著書に『元気のでてくることばたち!』(近代文芸社) 『おやじの腕まくり』(JULA出版局) 『いのちの対話(共著)』(集英社) 『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

## ますますよくなる

俳優 藤本隆宏さん

レで8位入賞を果たした。2回のオリンピックを経験したが、いろんな意味で悔しさが残った。アトランタを目指してオーストラリアに水泳留学をした。そこで人生の大転換が待っていた。初めて見たミュージカル『レ・ミゼラブル』に心が揺さぶられた。雷に打たれたようだった。

オリンピック周期の4年に慣れているから、藤本さんの場合は、石の上にも4年なのだ。だが、オーディションはことごとく落とされた。苦しかった。悪いことは重なるもので、失恋もした。この時は3日3晩泣き続けるほど、落ち込んだ。

1995年に帰国して、さっそく劇団四季のオーディションを受けた。代表の浅利慶太さんを前に「僕は努力の天才です。努力をさせたら誰にも負けません」と訴えたのが功を奏したのか、合格出来た。

そんなとんだ底のときに出会ったのが、元オリンピック水泳選手でタレント活動をしている木原光知子さんだった。俳優になつてから、水泳選手だったことを公にしないようにし

しかし、アトランタ五輪の選考からは、もれた。選考会の成績は、わずかに及ばず3位。母との電話では男泣きした。次の日からは、四季のトイレ掃除が待っていた。水泳の世界からは縁を切った。水泳に全身全霊かけていたから、代わるものがないと生きていけなかった。演劇にそれを求めた。

広瀬武夫役に選ばれて最初は単純に嬉しかったが、人物像を知るにつれプレッシャーが増した。ロシア語を集中的に学び、台本に書かれた広瀬さんを演じることに集中した。ロシア人の恋人との共演もあったが、美人女優の顔に見とれている余裕などなかった。

「日本代表として、ロシアの方々の中に入った気持ちだったので、とにかく自分の演技に必死だった。だが、広瀬中佐を演じたことは一生の宝になると思ってる。

自分の出演するところは正座して見ている。第二部のラストで広瀬中佐は亡くなったが、今年12月放送の第3部が終わるまでは、自分の中の広瀬中佐は終わらない。

人生の大転換  
1970年、福岡県生まれ。根っからの九州男児だ。謙虚な言葉使い、礼儀を心得た振舞い、真面目な人柄に、すっかり惚れ込んだ。水泳を始めたのは、6歳のとき。家から少し離れた田んぼの一角にビニールハウスで囲ったプールがあった。母は、プールに来て声援を飛ばすことはなかったが、食事に厳しくて、食べ残しを許さなかった。食べ終わるまで正座させられた。だから苦手の野菜も食べた。食べなければ水泳で強くなれないと思っていた。中学生で注目されて、個人メドレーの選手として鍛えられた。一日に2万メートル泳いだこともあった。とにかく、ひたすら泳いだ。1988年、日本選手権個人メドレーの200mと400mで優勝。17歳で日本男子競



俳画/イネ・セイミ

ていたが、木原さんに「君を育ててくれたのは水泳でしょ。水泳を大事にして生きていきなさいよ」とハッパをかけられた。「オリンピック選手」と言われることに、かたくなに抵抗感を感じていたが、木原さんに「実績を表に出さないうちはおかしい」と言われ、名乗るようになった。自分の原点である水泳に立ち返ったとき、自信が蘇ってきた。木原さんの水泳教室での指導を始め、木原さんが急逝した今も続けている。

**かあちゃんの教え**  
今年5月の母の日に、藤本さんは、初の朗読劇に挑んだ。作品は、重松清さん原作の「かあちゃん」。緊張の面持ちで臨んだ舞台で、朗読する脳裏には、母の美津子さんのことが思い浮かんでいたことに間違いはない。小さい頃、ほめられたことはほとんどなかった。水泳で賞をとってもほめられない。オリンピックに出場したときに初めて「よくやったね」と言われた。以来、4年おきに誉められている。2回のオリンピックと、四季で大きな役をもらったとき、そして『坂の上の雲』に抜擢されたときだ。

18歳で福岡から上京するときには、「関門海峡を渡ったからには一旗あげるまでは絶対に帰ってきなさんな」と言われた。今でも藤本さん自身は「旗あげられていない」と思っている。自分も厳しい母と同じような思考回路で生きてきた。「だからまだまだ。母にはまだ胸を張って見せられない。努力あるのみ」。自分に厳しい姿は、広瀬中佐に重なる。

**ラジオが好き!**  
村上信夫  
好評発売中

**イネ・セイミプロフィール**  
フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

**俳画教室開講中**  
ところ 常滑屋  
とき 月一回 第二・第四金曜日  
午後一時~三時  
会費 一回 二二五〇円(三ヶ月分前納制)  
問合せ ☎〇五六九(三五)〇四七〇

何か始めたいと思ってる貴女。数年後素顔にフルートを奏でる姿がそこにあります。楽しく個人レッスン致します。

講師 **イネ・セイミ**  
(フルート奏者 指導歴30年)  
レッスン時間5,000円(テキスト代付)  
申込み 0569-89-7127  
お問合せ scimline@oasis.ocn.ne.jp

**好評発売中**



新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』就職

—自分ドラマつくろう— (4) 岡田 清治

姪の就職

裕美はじつと聞きながらも、上の空のような顔を真三に向けていた。真三は裕美の様子をうかがいながらも、別のことを考えていた。企業訪問で同じことを繰り返す、挙句の果てはフリーターやニートになりかねない。こんなことが可能なのは親のすねをかじるパラサイトシングルで生きていける甘えが透けて見える。

真三は現実社会を直視した形で話をしていた。裕美との話をいま一つ計りかねていた。相談だということは、具体的なことがないと、ただ自分で想像しながら話すことになってしまふ。

そろそろしゃべり疲れてきた。日曜日の午後四時を過ぎていた。平日と違ってビジネスマンの姿はほとんど見えない。

喫茶店内には男同士や女のグループなど三組が談笑していた。テーブルの上のカップはとくに空になるほど、結構長時間いる。アルバイトと思われる店員も追い立てる気配はない。

「もう一杯何か飲まれませんか」

「結構です」

「そうですか」

「真三さんの奥さんの妹さんは確か、小学校の先生をされていましたね」

「ええ。彼女は四、五年前に辞めました」

「そうですか。おしいですね」

「大変なようです。例のモンスターペアレントが激しく、やっておれないということでした」

「モンスターペアレントというのは自分勝手な理不尽な要求をする親たちのことでしょうか。あれは一部の人間たちではないのですか」

「いや、今の時代の特徴のようです」

真三は義理の妹の八重子から聞いた話をはじめた。担任クラスの中に比較的頭のいい子がいた。だけど、わがままに育てられたのか、たえず自分に気が向いていないと、がまんできない。例えば、テレビでDVDをかけて授業をしようとすると、「テレビが見えない」と文句を言い出す。

「見えるでしょう」

「おれの方に向けていない」

「クラス全員で見るものです」

「前の先生の時は、おれの方に向けていた」

無視してそのまま授業を進めると、急に立ち上がって、先生の前に来て、両手を上下しながらじまをする。このため、注意するが、ふてくされる。

そのことを連絡帳に「家の方でも指導してください」と記した。

ある日、その子の親が教頭のところに向いて「稲田先生を辞めさせてください」とねじ込んだ。教頭がその勢いに押されて、おたおたしていると「教育委員会に伝えます」と捨て台詞を残して帰って行った。

事の真相やその指導を検証することなく、教頭は教育委員会に伝わり、マイナス効果しかないと、担任の稲田八重子と呼びつけた。

「どんな事情か知らないが、稲田先生から頭を下げてほしい」

「どうして私があやまらないといけないのですか」

「理屈はどうでもいいんだ。ここは頭を下げるのが一番いい解決方法なんだ」

「違うと思います。親にきちんと説明することが大事ではないですか」

「君も頑固だな」

この事件の約一ヶ月前その子が些細なことでケンカしたことがあった。それを知った担任の八重子は連絡帳に二人の親にケンカの件をお知らせのつもりで書いた。

ところがモンスターペアレントの方が「うちの子に限っていい解決方法なんだ」

「違うと思います。親にきちんと説明することが大事ではないですか」

「君も頑固だな」

この事件の約一ヶ月前その子が些細なことでケンカしたことがあった。それを知った担任の八重子は連絡帳に二人の親にケンカの件をお知らせのつもりで書いた。

ところがモンスターペアレントの方が「うちの子に限っていい解決方法なんだ」

「違うと思います。親にきちんと説明することが大事ではないですか」

「君も頑固だな」

この事件の約一ヶ月前その子が些細なことでケンカしたことがあった。それを知った担任の八重子は連絡帳に二人の親にケンカの件をお知らせのつもりで書いた。

ところがモンスターペアレントの方が「うちの子に限っていい解決方法なんだ」

「違うと思います。親にきちんと説明することが大事ではないですか」



砂漠の国・ナミビア (著者撮影)

「違うと思います。親にきちんと説明することが大事ではないですか」

「君も頑固だな」

この事件の約一ヶ月前その子が些細なことでケンカしたことがあった。それを知った担任の八重子は連絡帳に二人の親にケンカの件をお知らせのつもりで書いた。

ところがモンスターペアレントの方が「うちの子に限っていい解決方法なんだ」

「違うと思います。親にきちんと説明することが大事ではないですか」



プロフィール 著者：岡田清治(おかだ・せいじ)

一九四二年生まれ ジャーナリスト (編集プロダクション・NET 108代表) 著書に『心の遺言』『あなたは社員の全能力を引き出せますか』『リヨンで見た虹』など多数

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。 FAX: 0569-34-7971 メール: takamitsu@akai-shinbun.net

悪くありません。子どもに聞くと、相手の子がいたずらしたからだと言うのです」と、ものすごい剣幕で怒鳴り込んできた。

どう説明しても聞き入れない。その子の母親は大卒で気が高く、「先生から注意されると、自尊心が傷つけられるようで、がまんならないのではないかと、妹の八重子が真三に話したことがあった。

八重子は県立の短大で、いわゆる教育大や四大卒の教諭に比べて、学歴コンプレックスを感じていた。彼女は体育科ダンス専攻で絵画や書道にもたけていた。

小学校の子どもらは学歴よりも、運動ができ、プールにも一緒に入って指導できる先生が好きなのだ。そのことがわかってくると、八重子は自信をもったのである。だから続けてこられた。

ところが、十年ほど前からモンスターペアレントが現れ、授業参観でも「先生の教え方が間違っています」と、いかにも高学歴の片りんをちらつかせながら批判するようになった。

八重子がかつての自信を失う日々が続いた。さらに追い打ちをかけたのが、パソコンの導入である。子どもの方がはるかに上手いのである。もともと機械音痴で自宅では夫が操作するのを見る程度で、自分でやってみようとはしない。

これもスポーツと同じで、やって見せないと子どもらは先生を尊敬しなくなる。さらに英語教育の方針を文科省が打ち出した。障害児の子どもも英語を話す時代だということである。

あれやこれやで八重子は完全に自信喪失となり、うつ状態に陥った。夫は高校の地理の教諭だったが、野球部の監督をしていたのもつばら県大会での上位に向けて連日遅くまで指導していた。

家で八重子が相談しても、「適当にやればいいのではないか」というだけで真剣に取り合わない。

八重子は突然、何もする気がなくなった。身なりにもかまわなくなった。そしてついに、学校を休むようになり、辞表を届けるのは時間の問題であった。さすがの夫も気がなったのか、近くのクリニックへクルマにのせて連れて行った。

診断の結果、「うつ病です」と告げられた。医師は夫も診察室に呼んで話した。

「うつ病になると、ある種の強迫観念に襲われただけ、すべてにわたって興味や失せませす」

「これは治るのですか」

夫が不安げな顔を医師に向けて聞く。

「うつ病は必ず治ります。自宅で回復します。できるだけ刺激を与えないようにしてください。精神安定剤をお出ししておきますので、しばらく様子を見てくださ」

「わかりました」

夫が八重子に代わって返事をした。

学校の先生のうつ病が急増していると報道されていたことを八重子の夫は思い出した。

やがて夫が八重子の辞表を届けた。

真三はうつ病については、自分の父親の善群三がひどかったの、ある程度理解ができた。群三の家に電話をかけても本人は出ない。

「お父さんは部屋に閉じこもったままです」

おふくろが答えた。

群三が遺した大学ノートに綴った日記にうつのことが

書かれていたのを見た記憶がある。

そこには「心の構造と作用」と称して、上部の半径が底辺に比べて小さい円筒形(意識域)の図があった。上部は意識の水面、底辺は意識の底である。上部から三分の一あたりまでが意識の中の自覚域で、その自覚域の一番下の中心点に自我(意識)と記して、「ここが正常位置」とある。自我意識は自分が自分であるとの自覚、または日常性の中で自分が自分でわかっている(了解している)範囲だということ。

自我が下へ行くほど、だんだん気持ち暗くなる。うつから躁に上昇した時は、うつ時の時とは反対に、底から上昇した勢いがあり、意識の水面より上へ飛び上がり過ぎて、多弁、多行動になるのを極力、自我の正常位置へ引き戻さなければならぬ。躁になった時、自己抑制によって、それを正常位置にすることが最も大切なことだ。それができないと、正常になったとは言えない」と記している。

「躁うつ病も重くなるとやっつきいですね」

「そうです。別人かと思っほほほです」

「舞はうつ病ではないと思っほほほです」

「彼女は音楽でうき晴らしをしているでしょうから、その心配はないと思っほほほです、悩んでいることは確かでしょうね」

「何を考えているのかわからないのです」

「先ほど、彼女は外国に行きたいというお話でしたね」

「実は、それなんです、どうもインドへ行くようなのです」

「どうしてわかったのですか」

「ある日、舞が出かけた時に、部屋の掃除をしようと、部屋に入ったのです。ふと、机の上を見ると、インド旅行のパンフレットが広がってあったのです」

「それで、どうされたのですか」

「そのパンフの下にメモがあつて、連休を利用して行く計画のようなものが書いてありました」

「なるほど。舞さんには聞いたかったですか」

「怖くて、聞けないのです」

「だから、僕に聞いてほしいというわけですか」

「実はそうなんです、真三さんが舞に会ってくださるかどうか、わからないので、今のまま言いそびれていました」

「裕美さんもインドと聞いて、多分、同じことを思ったのではないですか」

「そうなんです」

「確かに、心配ですね」

「舞に会っていただけませんか」

「……」

「会って真意を確かめてほしいのです」

「少し、時間をください。考えてみます。近いうちに僕の方から連絡します」

「よろしくお願ひします」

その日は、そのまま別れた。

真三は気が高ぶって真つ直ぐ家路につく気にはなれなかつた。時刻を見ると午後の五時を回っていた。

知人と呼びだそうと、一瞬考えたが、すぐに打ち消して名古屋駅に向かった。舞に会うにしても、ただ就職について聞いただけで心を開くだろうか。どうしたら本当の気持ち打ち明けてくれるのだろうか。安請け合ひしたが、真三の内面を暗雲が覆い、憂鬱な思いがしていた。

(続)

# 井田慧(どんだけい)的 世界・セカイ・せかい・SEKAI

## 田村修一(芸名:井田慧)

3月11日の東日本大震災から1ヵ月間はほぼ毎日のように余震が続き、地面が揺れているの自分だけが揺れているのか判断がつかない状態が続いていた。事務所仕事をしているのに酔いするような感覚に襲われたこともあったが、いつの間にかその船も陸地に辿り着いたようだ。会社では海外出張を自粛する命令も取り消され、久々にスペイン出張に行くことになった。梅雨入り直前の5月末、成田国際空港でフライトを待っている間、寝不足のフラフラ頭のまま日本円をユーロに両替するための行列に並んでいた。震災や原発の影響で海外からの旅行客が激減していることもあり、空港は閑散としていたが、いつもの平和がそこにあった。

とにした。チューリッヒまで12時間30分+バルセロナまで1時間45分、合計14時間15分の旅である。時差の関係もあり、朝10時頃に成田を出発して、同日の19時頃にバルセロナ・エル・プラット空港に到着した。この空港は白を基調としていて、天井が高く空間がたつぷりあり、開放的なレイアウト。『スペインのデザインはカッコ良いなあ!』と感動の声をあげてしまった。

有名な作品は、何と言っても『サグラダ・ファミリア』だ。バルセロナのシンボルであり、世界文化遺産。毎年何百万人もの人々が世界各国から観光に



事務所内のコミュニケーションで英語を使う必要はなく、日常の中で『グローバル』を意識することはなかった。世界でも有名な電気とオタクの街『秋葉原』に遊びに行っても、アジア人がほとんどで『アジアの観光地』と言った方がしっくりくる。一方、文字通り世界中(グローバル)の人々が実際に足を運ぶサグラダ・ファミリアは、まさに『グローバル観光地』と言えるだろう。

バルセロナは『ガウディの街』なのかもしれない。街中にある街灯や床のタイルさえガウディの作品なんて場所もある。大阪の御堂筋、東京の銀座

の空港に到着したときでさえ感動したのだ。世界文化遺産に感動しないわけがないと信じていた。しかし、実際は、『ふう〜ん、これが世界文化遺産かあ〜』程度。むしろ、『これって、デイズニールランドのアトラクションと何が違うの?!』なんて感想さえ持った。ところが、カサ・ミラに併設されているお土産ショップに飾ってあった『カサ・ミラ』の巨大な白黒写真を観た時、すべてがガラッと変わった。まさに、文字通り、ガラッと変わったのだ。確か3千円程度のお土産用の写真だ。

『カサ・ミラ』がこんなに大きいとは思わなかった。こんなに重厚感がありながら優雅な姿をしているとは思わなかった。さつき自分の目で見たモノとは明らかに違った。素直に驚いた。感動した。なんて美しいフォルムなんだろうと心底思った。

急いで、店を出て、もう一度『カサ・ミラ』に向き合うと、美しかった。つくづく、人間とは面白いと思う。ほんの5分前まで何の価値も見出せず

は思わない。それも素敵な感覚だと自画自賛できる。そして、『カサ・ミラ』に向き合い、美しいと思った。ジブンを居る。どちらも同じ僕なのに、そこには違う世界が存在している。しつこい様だが、どちらが正しいという話をしているのではない。『ジブンを生きる世界は自分で選べるという感覚』をシェアしたいだけだ。ミュージカルの稽古を通じて、自分以外の人たちの人生を演じてみて、同じ物事でも役によって捉え方、反応の仕方が異なることを身をもって知った。たった1つのジブんに縛られることなく、自由に選んで良いのだろう。もつと、軽やかに、ふんわりと、ホップ、ステップ、ジャンプの要領で…。

優れたデザインと

言えば、週末の1

日を使ってバルセ

ロナ観光に興じた

際、改めて『デザ

インの国 スペイン

『地震だ!』

今からスペインに旅立とうとして

いるのに、久しぶりに地面が揺れた。

『もしかして、戻ってくる場所がな

くなるかも…』一瞬頭の中を過った

言葉。震災のあと、『今度は東京湾直

下型の地震が来るぞ』という噂が広

まっていた。毎日、揺れているのだか

ら、本当に来るかも…と不安に思った

時期もあったが、いつの間にか忘れて

いた。今、まさに日本を離れようとい

うそのときに『地震』。頭の中で『東

京湾直下型地震』を連想せずにはい

られなかった。こんな感じで久しぶりの

スペイン出張は始まった。

バルセロナにはローマ時代に起源を

もったゴシック地区の旧市街と、世界

中の高級ブティックやレストランが軒

を連ねる新市街が共存している。現地

の駐在員によればバルセロナ観光には

最低3日は必要なのだそう。バルセ

ロナはピカソやミロなど様々な芸術家

を輩出した都市だが1日しか観光出来

ない僕は、アントニ・ガウディの作品

群を中心に見学することにした。一番

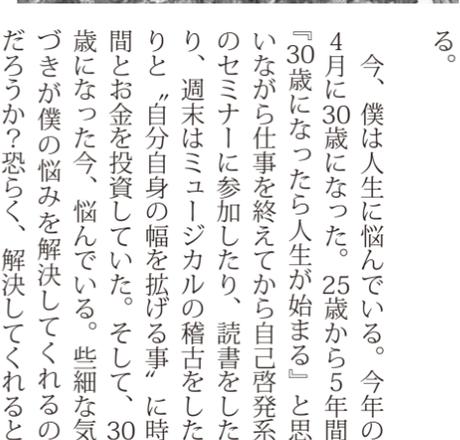
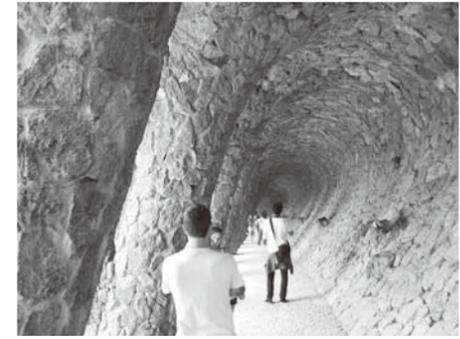
訪れる。まさに『グローバル観光地』

なのだ。ユニクロや楽天が社内の公用

語を英語にすると発表して以来、日本

に住む僕たちの生活で英語化、ひいて

はグローバル化が身近なものになった。



日本からスペインに行く場合、直行便はない。パリ、アムステルダム、フランクフルトなど、ヨーロッパ各国で乗り継ぐルートが一般的で、今回はチューリッヒ(スイス)経由で行くこ

と訪れる。まさに『グローバル観光地』なのだ。ユニクロや楽天が社内の公用語を英語にすると発表して以来、日本に住む僕たちの生活で英語化、ひいてはグローバル化が身近なものになった。

僕の会社でも日本事務所の社内会議を英語化していく方向性が示され、急に『グローバル』が自分の日常生活にも入り込んできた。仕事柄、日常的に海外との交渉や海外出張はあるが、日本

にあたるようなグラフィア通りをウインドウショッピングを楽しみながら進んでいくとガウディ作の『カサ・ミラ』や『カサ・パトリヨ』(共に世界文化遺産)がある。日常生活と世界文化遺産が共存しているのだ。実は、ガイドブックを読み込み初対面を楽しみにしていたガウディの作品だが、実際に見学してもあまり感動しなかった。もつと感動すると思っていた。バルセロナ

今、僕は人生に悩んでいる。今年の4月に30歳になった。25歳から5年間、『30歳になったら人生が始まる』と思

いながら仕事を終えてから自己啓発系のセミナーに参加したり、読書をしたりと、週末はミュージカルの稽古をしたりと、自分自身の幅を拡げる事。に時間とお金を投資していた。そして、30歳になった今、悩んでいる。些細な気づきが僕の悩みを解決してくれるのだろうか? 恐らく、解決してくれると思

### 著者紹介

**田村修一(芸名:井田慧(どんだけい))**  
1981年、群馬県生まれ。東京理科大学理学部卒業後、『商社マン』として、欧米、韓国、南アフリカなど世界を飛び回り! 浦安のオスカルこと夏野善徳氏が率いる善徳座歌劇団に所属してミュージカル俳優として舞台の上も飛びまわっている! チャンス☆コーディネーター秋田英子氏を始め、多くの方からチャンスを頂き活動の幅を拡大中。NPO法人知的生産の技術研究会編『知の現場』(東洋経済新報社刊)では小飼弾さん他著名人5名の取材・インタビューを担当した。  
善徳座歌劇団の最新情報はこちらでご確認いただけます!  
⇒公式HP: <http://rose-opera.me/>  
⇒公式ブログ: <http://roseopera.blogspot.com/>  
※新作『ガイズ&ドールズ』は2011年10月22日(土)・23日(日)に千葉県浦安市のWave101で公演予定!

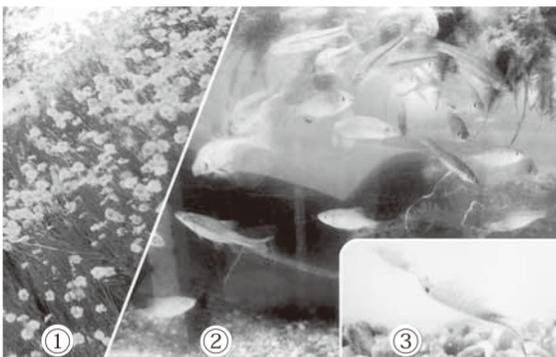


〈完〉

知多の動植物雑記(二七四)

原 穰

知多半島のいろいろな場所... 知多半島のいろいろな場所... 知多半島のいろいろな場所...



自然っていいな。でも要注意

水槽へ入れ... 自然っていいな。でも要注意... 水槽へ入れ、上向きに...

める姿に魅せられている(写真②)

そんな中、ふと気付けばモツゴの背びれや尾びれ、尻びれ... 尾の黒い帯も目立つている...

二ヶ月程の体は薄緑ながら... 透明に近い体を逆さにして背泳ぎして...

町の考古学

船の歴史(百六十五) 奥川弘成

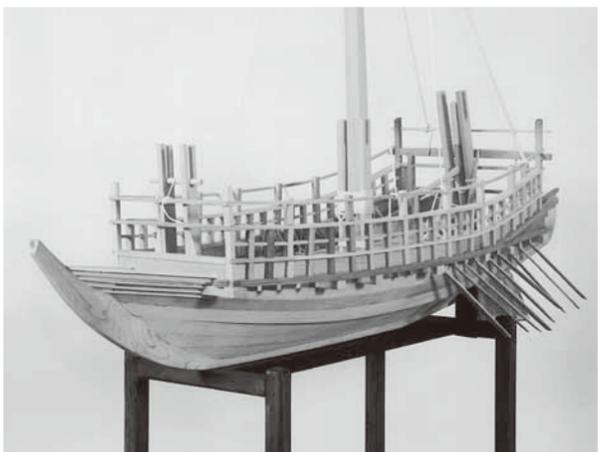
遺跡

室町時代、伊勢船や二形船などの大船を戦備用に船の上部構造を造作した安宅船は、水軍の基幹船でした...

水切りのよい一本水押の鋭い船首が特徴です... この関船を小型にしたのが小早船です...



関船(前田和正氏製作)



小早船(前田和正氏製作)

関船が乗り組む人を守り、居住を快適とした船上の矢倉を備えているのに対し、小早船は足隠し程度の垣立がつけられただけで、敵からの防御は...

格段に低かったといいますが、その分、船体は軽く軽快な航行ができたことで、さまざまな用途に用いられました。

葉先だけ水面に出して植田かな... 若竹俳壇... 毎月十日までに葉書で...

若竹俳壇

毎月十日までに葉書で... 作品募集...

- List of names and their associated haikai poems, including names like 吉田ひろし, 山下悠児, etc.

ちよっとおじゃまします 陶芸家 夏目 雅仁さん 夏目かよ子さん... 陶芸家 夏目 雅仁さん 夏目かよ子さん... 陶芸家 夏目 雅仁さん...

Sound collection イネ・セイメイ、望月雄史... 2011.7.23(土) 開場 pm5:30~ 開演 pm7:00~... 音響館 イングリッシュローゼ...

